

上演3 山形県代表

山形県立鶴岡中央高等学校

作 木村麻由子

「ここだけの話」

講評文

秋田県立秋田中央高等学校 石戸凜花

まず題名の「ここだけの話」は、私たちも日常でつい言ってしまいますし、聞き馴染みのある言葉なのでとても興味を惹かれました。そして始まったのはある演劇部の青春の物語です。これから何が始まるんだろう、ととてもワクワクした気持ちになりました。各登場人物のキャラクターを活かしたコミカルな展開、会話の端々から感じる友愛、そして未知のエイリアンに立ち向かう渾身のアクション。それら全てが観客を釘付けにし、この作品の大きな強みになったと思います。

作品内で描かれた今から約100年後の世界は、異常気象によって畠仕事ができなくなってしまったり、それどころか部活動までバーチャル空間で行わざるを得ない状況だったりしました。仮想空間内だからこそできる展開の面白さもありますが、近年の異常なまでの暑さを思い出すと他人事とは思えず、いずれ地球温暖化によって本当にここまで変化が起こってしまうのかもしれないという恐怖を感じました。しかし、たとえ自然環境あるいは家族との関係性というような自分の意志や力だけでは抗いきれない何かであっても、やりたいという気持ちと、友人とをして立ち向かうことができるのだという強さが、「NoPlay, NoLife」「NoFriends, NoLife」という言葉に表されていたように思います。

ラストシーンで、すずかだけが緊急速報をはじめとするあらゆる喧騒が流れる中、仮想空間内から出ずにひとりで佇んでいる姿はこちらに何かを訴えかけているようでドキッとさせられました。すずかは群青との思い出に浸って現実に戻ってこないのか、あるいは仮想空間に夢中になって現実の危険に気づけないでいるのかもしれません。そして登場人物たちが未来の人間であることから、これらは仮想の作品世界内だけではなく、今を生きる私たちにとっても他人事ではないのだと注意喚起をしているように感じました。一方で、同じく最後の場面で群青とすずかのコソコソ話をしていました。これがタイトルである「ここだけの話」に通じるところがあるのかと思いました。ふたりの会話がどのような内容だったのか気になるところですが、それだと「ここだけの話」ではなくなってしまうので、あえて触れないで起きます。特にラストシーンから以上のようなふたつのアイデアが生まれました。素敵な舞台をありがとうございました。